

## 定例研究会要旨

日時：平成 25 (2013) 年 1 月 16 日 17:40~19:40

会場：東京外国語大学 語学研究所

題目：「動詞ラルル形をめぐる ―古代語の観点から―」

発表者：川村 大 (東京外国語大学大学院総合国際学研究院准教授/日本語学)

本発表では川村『ラル形述語文の研究』(くろしお出版 2012)の概要を、第3章・第4章を中心に紹介し、関連する話題として、同書の立場から見た日本語に対する *passive* 概念の適用妥当性を論じた。

- 1 「動詞+レル・ラルル、ル・ラル、ユ・ラユ等」の研究について、現在下記の3つの課題が存在し、かつこの3つの課題が相互に依存しあう関係であることを再確認した。
  - I 意味面に注目した受身文研究史の全体的把握と、それに基づいた受身文の本質に関する理解
  - II 動詞ラル形述語文の諸用法の整理・確認(用法の再定義や新規設定を含む)と、各用法の意味・構文両面にわたる精密な記述
  - III 動詞ラル形述語文の多義の構造に関する解釈
- 2 古代語の動詞ラルル形(動詞+ル・ラル、ユ・ラユ)を述語とする文について、その諸用法(受身、発生状況描写、自発、意図成就、可能、尊敬)の文法的特徴を示し、定義を示した。特に、従来「受身文」として一括される受身用法と意図成就用法については、次の3点をやや詳しく論じた。
  - (1) 意図成就用法を別立てする必要性
  - (2) 受身用法・意図成就用法のそれぞれを意味の側から定義する必要性
  - (3) 受身用法を「主語者が、自分の意志とは関係なく、事態(他者の行為や変化)から何らかの影響を被ったと感じることを表すもの」と定義する必要性
- 3 古代語の動詞ラルル形述語文の多義の構造は、表現上現れる意味(〈自発〉〈可能〉等)どうしの拡張・派生関係で捉えることが困難であることを確認し、その上で、尾上圭介氏の「出来文」説に立てば諸用法が現れる論理を有効に説明できることを示した。(ただし、「出来文」説の他の有効性について、別に公開するハンドアウトには記載があるが、当日は割愛した)
- 4 本発表の立場(「出来文」説)では、受身用法の文、発生状況描写用法の文、いわゆる「非固有の受身」(近代以降欧文直訳体の影響で一般化したもの)の3者は、それぞれ別の文類型と位置付けるが、この3タイプの文を「受身文」として一括する通常の見解は、実は西洋語の(構文的特徴で規定される) *passive sentence* 概念を日本語に適用したものであり、日本語(特に古代語)の用例分布からは導き出せるものではないと主張した。

なお、passive 使用の動機としてしばしば下記の3つがあげられるが、

- a 《行為者》項への言及を避ける．《行為者》項から視点を外す．
- b 《対象》項に特に言及する．《対象》項に視点を当てる．（含、《対象》項をめぐる属性叙述）
- c 自動詞文の補充

古代日本語においては、a は文中に《行為者》項を明示しないことで果たされ、b は《対象》項の題目化（係助詞への添加）で果たされ、c は有対自動詞の派生によって果たされる．だから、少なくともこの点では passive に相当する文類型が古代日本語に無いとしても問題は生じないし、またしたがって、ラル形述語文の受身用法を2(3)に示したように規定しても差し支えないということを指摘した．